世界の幸せをカタチにする。
Creating Peace & Happiness for the World
Musashino University
武蔵野大学 学術機関リポジトリ
Musashino University Academic Institutional Repository

資料　折口信夫・女子英學塾講義　短歌の話　昭和三年

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-06-27 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 加藤, 歌子 メールアドレス: 所属:
URL	https://mu.repo.nii.ac.jp/records/564

資料　折口信夫・女子英學塾講義　短歌の話　昭和三年

加藤　歌子編

〔凡例〕

・本資料は、国文学者、折口信夫（釈迢空）が昭和三年度に女子英學塾（現津田塾大学）で行った講義の翻刻である。

・資料の解題は、本学兼任講師の伊藤高雄氏が國學院大學栃木短期大学國文學会の『野州國文學』第八十六号（平成二十五年三月）に「小池元男ノート――折口信夫・郷土研究会ほか講義ノート――」、及び『國學院雑誌』第一一四巻第十号（平成二十五年十月）に「折口信夫・國學院大學講義その他――小池元男・石上順ノート――」として報告しているので、そちらを参照していただきたい。

・本紀要に翻刻する資料は、その小池元男ノートのノート番号59で、表題はないが、女子英學塾（現津田塾大学）にて行われた「短歌の話」と題された二日間にわたる講義である（小池ノートの二四頁冒頭「寛の雑誌が出て、世の中に」の枠外に「二日目」とある）。ノートの裏表紙には「國學院大學　國文學科　昭和三年度　小池元男」と記されており、これによって本講義の講ぜられた年を昭和三年と判断した。

・ノートはブルーブラックのペン書きである。

・表記は、原則として漢字は常用漢字とし、古典的仮名遣いとしたが、場合によっては正字を用いたこともある。また、翻刻の整理に際しては、読解の便を考えて、省略字体や文中・文末表現を若干整えた場合がある。（例）奈→奈良朝、平→平安朝、K→宮廷など。空欄や翻字不可能の箇所は□とした。

・本翻刻に際しては、加藤が翻刻を行い、國學院大學一年生の池田智子と伊藤氏とで読合せをした後、加藤が整理した。

短歌の話

於女子英學塾

短歌の起りを話した。

和歌の古い形のもの、中、一等新しいものの出来た原因は、民謡と同じものが次第に文学の形になつて来た。奈良朝の盛時、漢文学もやり、日本文学も知つてゐる人たちが沢山出て、短歌を純粋の文学らしいものとした。平安朝に行つて、文学が遊戯

として短歌の形を専らとり入れた。それで平安朝以後、歌謡から離れて来た。
短歌の中に歌謡の形のものが残つてゐる。古くより宮寺の中に短歌の形のまゝ残つてゐた。
面白くなくなると、文句を変化させる。宮寺の声楽の中には、短歌の形のものが存外長く続く。世間全体に短歌は、歌謡でなくなり、民謡としての生命を失つた。その期間が長く続いて明治までやつて来た。
今日の話は、短歌の起元より……。
どうも話を落ち着きはらつてし過ぎて了つた。人間の落ち着き自慢はいけない。
明治の短歌に入らずに了つては、気の毒でもあり、残念でもあるから、明治の短歌をやつて、それから、上にのぼる。
それにしても、昔の事を少し云はないと工合が悪い。活動を逆さに巻いて見たい。
想像では出来るが実際にやらねばわからぬ。個々の事実を一々する事は出来ぬ。
万葉集と古今集を今日話さねばならぬ。日本の歌集の中一番大事でもあり、歴史的に有名なものが二つある。
奈良朝より奈良朝前まで、奈良、藤原、大津、飛鳥、これだけの都の間に生きてゐた人が、まづ中心である。だが本当は誰が作つたか不明。それ以前の歌は、あてにならぬ。万葉集があり、平安朝に百年目に古今集が出来た。この二つが、日本の歌の中で一番際立つて変つた二つで、対称的に何時でも云はれてゐる。これのみでなく、文学としての値打ちがどれだけ違ふかと云はれ、今、万葉集の方が良くて、古今集がつまらぬ事となつてゐる。学問としてはどんなものも読まねばならぬ。概括してつまらぬものでも、中にいゝものもあり、素質のいゝものもある。
古今集は、文学としての自覚をもつた一番はじめのものである。
万葉集は、遊戯的の態度がまじつてゐる。でないものは、無意識に作つてゐる。文学を何たると問題にしてゐないものがある。文学的のものを作らうとして、良いものが出来るかどうか、不明である。親孝行をしたくて不孝になる人がある。意識にとらはれてやつてゐる事は、無意味になる。持つて生まれたものが大切で、うまくならないやうにと思うてしてもうまくなるものがある。文学は、情熱が大切。インスピレイシヨンは窓を開けて来ぬ。
古今集は、大事なものになつてゐる。勅撰集のはじめのものとなつてゐる。勅撰集の最初のもの故に大事なものだと考へられ、その為に立派なものだと考へられ、古今集の編纂者は名誉を博して信用せられてゐるが、あてにならぬ。官撰文学はろくなものが出来ない。学問の他は、お上の力を借りればいゝ事もあるが、文学では作者自身苦しまねばならぬ。
万葉集と古今集が後に影響を与へた。平安朝百年に万葉風の歌が古くさく皆感じられ、それで新しい作物を作らねば生き甲斐がない。作つてゐて作り甲斐ない気持になつて、古今の作者はいろんな事をした。今日無理すれば行きづまれば、新しい試みをすればいゝ。絵の展覧会等わからんで見てゐる。さういふ風

に理論、主義等云ふもので自分等の態度を明示せんとするが、そればかりでいゝ文学は出来ぬ。新しい刺激許りでいゝ文学は出来ぬ。

小説戯曲が第一だが理論主義のみで作物としては本当のものが出てゐない。今の時代はしかたないから、それを見て感心してゐる外ない。それはいけぬ事で、多少批判の力を持たねばならぬ。若い心ですべてを非□してゐてはだめである。観賞力を養なはねばいくら□でもだめ。

古今集が良くなり、平安朝二百年で、万葉集は読めなくなつた。万葉仮名で書いてある故に訓みが下らぬのである。

平安朝二百年に万葉集に訓み方をつける試みをした。古今集ばかりで、そのあとを追ひ、歌が固定して来た。その固定を破る為に工夫した。工夫する人は偉い。

正月のお歌会でようあんな下手な歌が行はれてゐると思ふ。日本人の文学は進んでゐるがあんなものではだめ、歌人が本を読まぬ為である。江戸から古今位しか読まぬ為である。

さういふ風に世間はつまらぬ。今の歌風——大歌所風の歌、旧派の歌、悪意を示すほどの存在でもない。一種のお祭りである。それであんなものが出る。昔の人はそんなでない工夫したが、平凡人では小細工に過ぎない。平安朝三百年あまり過ぎ去つて、も少し、といふ間に次第に万葉集が読まれて来た。百、二百、次の百年頃、万葉集の研究の結果が歌に出て古今集の歌とちやんぽんに作る事となつた。中には藤原基俊の如きは、万葉風の歌を作ると云ふてゐる。自分は万葉風だといばつてゐるが、万葉風でも何でもない。当時の人はさうだと思ふてゐる。その外志のある人は、ぽち〳〵読んでゐた。平安朝末に勢力を得て来て、鎌倉時代にわれ〳〵が思はぬほど、万葉歌人が出て来た。それが残らなかつた。書物がなかつたら、ない事になれば、安心してゐられる。

鎌倉時代には沢山万葉ぶりの歌を作つた人は考へられるが皆滅びて了つた。たゞ一人実朝が残つてゐる。本当を云へば、陰に沢山先生がゐる。実朝は、でくかもしれぬ。ひよつと本当に作つたかもしれぬ。実朝は存外つまらぬ生涯の人の様だが、歌が残つてゐるので偉さうに見える。

実朝の歌を通して見ると、あの時分に万葉風の歌が盛んになつた事が知られる。それには僧の階級から万葉風が出た。平安朝からも仏さんは違つた歌を作つてゐた。古くから日本では宮廷を中心とした社会に対して、も一つ大きな社会があつたが、政事上の権力ではない。二つ、世の中を分けると、宮廷に対して寺の生活があつて、自由な社会的に特殊の対遇を受けてゐる。自由な生活が許してあつた。寺の生活は、われ〳〵が考へられないほど高い位置を占め、どうかすると学問・文学では、宮廷は脅かされ、教育されてゐた。

僧の社会では昔より自由な歌を作つてゐる。僧も平安朝より沢山歌を作つてゐる。少し優れた僧は、皆違つてゐる。平安朝の名高い僧は貴族と接近してゐる故に、形だけは融合して来て、よく似た歌を作る。西行もよく似た歌を作つてゐるが、そこを叩くと貴族の出来ぬものがある。宗教的信念の堅い仏教の歌が

あり、ごく自由で、殺風景で、乱暴である。栂尾の明恵上人の、

山寺も法師くさくはゐたからす心きよくはくそふくなりと

宮廷歌人の上でこれほど俗ぽい歌である。心さへさつぱりしてゐれば、便所にゐても良いと云ふ歌である。歌は良くないけれども生きて動いてゐるものが立派である。技巧が文学とするには足りないだけ。も一つ心が燃えてくれば立派な歌となつたわけ。実朝の歌を通して見ると、僧の歌の影響を受けてゐる。実朝の顧問の僧、隠者が大分ゐる様である。かくして来る中に、次第に万葉集の味がわかつて来た。これまでは、何かへんてこなものだ程度にしかわからなかつた。これが、南北朝の初め頃になると、はつきりと形を表して来た。

われ〳〵は南北朝に対して問題にしてゐないが、楠・新田等が生命をかけて戦つたとなると、南朝が正しいと思はずにはゐられないが、正して行けば両方に問題がある。天子間には問題がなく宮廷を盛り立てゝゐる連中の問題だけである。

南朝は文学の上では劣つてゐる。われ等の心でおさまらぬ事である。南朝の歌集の新葉和歌集、宗良親王が撰ばれたこの歌集は、面白くて、やかましく云はれる。この歌集より悲痛な南朝の歴史を忘れて読むと、面白味が減つてくる。場合〳〵で今までの見方の誤りを正したいから寄り道をする。

日本の歌では、作者の境地その他を問題にせいでも良いと云ふてゐるけれども、それを見ないわけには行かぬ。短い詩形であるからして、日本の歌といふものは形に制限がある。文学者の作物を作る境遇を頭に入れる事は、理屈の上から云つて成立せぬ事でない。普通の文学でも作者の生活・性格を知らねば何にもならぬ。

今までの日本の歌の批評は、人によつてのみしてゐる。優れた人はいつでも良いものを作つたと思ふてゐる。この見方があまりやかましかつたので、文学は作品のみで考へよと云ひ出し、歌の場合ではことにひどい。しかし歌の場合、作者の境遇を知る事が大切である。

新葉集も、それを見ねばならぬが、とらはれやすい事情故に、実物の値打ち以上に評価せられてゐる。

北朝にもつまらぬものが沢山ある。歌詠みがいけない。皇室の血統が分れると、そこへ皆ついて行く。歌詠み等は生活態度が悪いのでくつゝいて行く。家筋〳〵に、歌人の家筋がついてゐる。平安朝では、天子の家々の他に怨霊がついてゐた。鎌倉になると、それが薄らいで来たが、歌の怨霊がついた。こんな連中が南朝の歌をまづくした。後、北朝に寝返りした。前からついてゐるものと新しく南朝から戻つた者と争ひがある。世の中は後より見てつまらぬものが流行する。世間の良し悪しを受け入れる人は程度が知れてゐる。世の中でもてはやされてゐる事がいゝ事でない。あまりいゝ、変つたものが出ると、異端者説とされる。まだ南北朝の名前のつかぬ頃より、万葉風の本当の歌が出て来た。古今ぶりと万葉風と調和した日本の歌として本質的にのびつくしたものが出た。二十一代集。その中の玉葉・風雅、この二つが飛び抜けて変つてゐる。優れた歌集である。今だにこの二つはいゝと思はぬ人が多い。やつと少しばかり気

のついた人が出て来た。二、三年前まで気づかなかつた。皆が不勉強なものであるからである。こんなわれ〳〵の生活に近いもの、驚かすものはいけないのだと思うて、世の中が受けつけなかつたのである。あまり世間から騒がれ、世人がやかましく云ひ、世人が讒言して、島流しになつた為である。藤原為兼である。二度流された。日野阿新丸の父親日野中納言資朝は、為兼が流される後ろ姿を見て、うらやましがつてゐたと云ふ話が徒然草にあり（「あなうらやまし。世にあらん思ひ出、かくこそあらまほしけれ。」）、その資朝は佐渡で死なれてゐる。当時の変つた人に尊敬された人で、歌が優れてゐる。この人の門下に優れた人が出た。玉葉・風雅を見ると、一番よくわれ〳〵に近い、万葉集では舌ざはりが悪く、古今は低劣である。玉葉・風雅の流をひらいたのは、為兼。世人は一部のみ歓迎し、為兼がだめであつた為にだめになつて了つた。民間に優れた人があれば良かつたが、皇族にうまい人が出たきり故に、いくら良くてもよい影響がなかつた。

い丶事に昔は、歌を作る人は歌を読まねばならず、敵派の歌も読まねばならぬ。読めば影響を受ける。不愉快だと思ふと自然影響を受ける。まして敵でなくて、たゞの歌詠みならば、いろ〳〵な歌を読むので影響を受ける。

後の歌人は、玉葉・風雅の歌は外道だと云はれてゐた。伝説的の信頼が続いて来て、学者が勉強しないので、玉葉・風雅が埋もれて了つてゐた。玉葉・風雅に良い芽を出して来た。万葉集の種が、日本の歌の上でい丶肥料を得て育つて来た。その後の室町以後の歌と云ふものは、非常にうまい人が出ねばならぬのに、出ないのは、歌は学問となつて了つて、文学を作るのは、学問と同じくなる。学校の作文と同じくなつて了つた。学校の文学は、閻魔帳に附属してゐた。広い文学はそんなものでない。そんな風では、わからぬものである。歌が学問だ、歌を上手に作る事は学問に達する事だつた。明治の始めまでは、それであつた。御歌所辺では、まだそれである。歌が下手だから学者でない。自分自身でアイロニーを作つて、歌が文学でも学問でもない事を示してゐる。室町頃には立派な歌も出来ながら、学問と文学と一緒になつた為に創作の動きを潰して了つた。学者は別である。文学者は、学問は要る。永続に尽きない泉を蓄へておく為に。文学者の為に、文学的情熱の外に学問は泉を枯れさせぬものであるが、その外に大したものでない。

変てこな時代故、歌が下手になつた。学問だ〳〵と云ふてゐる中に歌が固定し、学問を固定して両方潰れた。それが、宝町より江戸の始めまでの様子である。

日本文学では、学問と歌との関係がある。出発点が歌より出てゐる故に、歌がわからねば日本文学はわからず、文学を作るのにも差し支へが出来てくる。

江戸になると学問が変つて来て、本当の文学となる。学問も研究態度を改めて来た。江戸百年頃より、い丶学問をして来、今までの学問と悪い事と和学とくつ丶いてゐる。和歌が固定してゐる事がわかつて、それ〴〵自由な歌を作る。

和学者は平安も読み、万葉集も読み、今までの歌ではいかんと

て、だん〳〵万葉ぶりの歌が詠まれて来た。和学者は、初め副業である俳諧を作る人、連歌師又はごく暇な僧等がやつてゐた。次第に進んで来ると、専門に古書を読む人が出来て来て、当然自分等のよりどころを作らねばならぬ。今までの人は、よりどころは連歌・俳諧等にあつた。後出のものは国文学によりどころを求めて、文学と古代の精神、日本の道徳と文学と結びつけた。かうなると又いけない。

しきしまの大和心をひとゝはば朝日に匂ふ山桜花

宣長は玉鉾百首等作つてゐる。つまり歌には、古代よりの道徳生活の精神が宿つてゐると考へてゐる。かうなると教訓してばかりになる。世人に模範を示さうと思ふて生きてゐる人はない。もつと自由である。全体として、その人が優れてゐると、その人の歌が世人の為に残るだけである。いゝ歌と、道徳を意識して作つた歌に、いゝ歌はない。道歌に限つて下手である。僧、又は、道話を作る人々の作つたものが沢山ある。

雪や氷をへだつれど落れば同じ谷川の水

おとし咄、落語家の云ふのに適してゐる。強い精神で、自分等が心の底ではつきり意識してゐないが、自分は国文学の為に生きてゐるのだ、国文学の上で何か為になる事をしてゐるのだと考へてゐるので、自然いゝ歌が出来てくる。

宣長は偉い人であるが、わかつてゐすぎて文学には向かない。下手だが、上手に見える。古体・新体を使ひ分けてゐるが、上手でない。旧派・新派如きの歌も出来る。歌をおもちやにしてゐる様なものである。わからん人の方が良い。宣長の没後の門人、伝統は何か強いものを貫つて来たつもりでゐる篤胤。

人はよし唐につくともわが杖は大和島根に立てんとぞおもふ

この歌にあらはれてゐる情熱は非常なものである。純粋の文学としては受け入れられないが、本気になつて作ると良い歌が出来てゐるのに、歌を馬鹿にしてゐる。かういふ態度の学者を国学者といふ。一つの理想を持つて来たものである。国学者の歌は万葉集、古今集、その他いろんな歌の影響を受けてゐる。その中で著しいのは、万葉集の色彩が濃くなり、中には純粋の万葉へ行く人がある。概して昔の人は万葉のみに固まると、何も知らぬと思はれる事を嫌つて、いろんな歌を作つた。国学者として末流の人が、本当の万葉の歌を作つてゐる。相当な地位の人は万葉をちやんぽんしてゐる。古義の作者は、万葉のみ一心にやつた筈の人であるが、万葉仮名で作つてゐる。歌の精神は、古今と万葉を合せた鵺(ぬえ)である。そんな中で国学者として比較的古い位置にゐる。昔の師弟関係は、一度逢ふてもよい。

賀茂真淵は純粋の万葉ぶりの歌人とは云へぬが、大体万葉風の歌を作り、自分は万葉の歌と思ふてゐたが、性格が弱いために語は万葉風だが、精神は近代生活としては価値のないものが入つてゐる。

日本の歌は形のみでいゝ事がある。何にもない歌が沢山ある。

まがねふくきびの中山帯にせる細谷川の音のさやけさ

何にもないが、描写してゐるところが一寸だが、そこまで行く中に気分が整理せられて整ふてゐる。病的だと云へばそれまで

だが、いゝ歌である。語についての直感があればわかる。もつとひどいのは、

　ますらをのさつ矢たばさみ立ち向ひ射る円方は見るにさやけし

「射る」までが序歌である。枕詞の長く育つたものである。本文は、「見るにさやけし」だけである。この歌はよくない序と本歌と融合してゐない故に。

さういふ歌が沢山あるがその歌のまねしたのは楫取魚彦の歌に、

　妹が着る難波菅笠水鳥のかづきてゆかな難波菅笠

大阪の東の深江に菅笠が出た。魚彦は下総の人であるから、おそらく知らぬと思ふ。「難波菅笠」に面白味を感じて歌ふたのである。ほとんど内容がない。一寸色彩をつけて恋愛趣味を効かせてゐるだけである。簡単である。

真淵の歌は万葉からのみを学び、歌に出て来る生活と云ふものは、ごくゆるい近代的の生活である。しかし、真淵の門下がさういふ歌を作る。江戸つ子の門下が多かつた。気が効いてゐるので、ハイカラをやつて、余分おかしい。その人々は、又本当の万葉風の歌を笑つてゐる。

真淵の弟子が地方へ散つてゐる。正統を信じつゝ。

秋成は文章のうまいだけの小説を作つてゐるが、歌も然り。大阪の人で京へ移つて長く住んだ人だが、万葉の形骸のみを学ぶ。

　香具山の尾上に立ちて見渡せば大和国原早苗取るなり

万葉風らしいが、非常にゆるい。見てゐないのである。万葉のどんなゆるんだ歌でもこんなゆるんだものはない。気持がゆるんでゐる。もつと急所をつかんでゐないので。その位の話にしておく。

国学者が本当に万葉風の歌を作つたのは少ない。万葉のみを作らうと思ひつゝ、万葉のみを作れなかつた。新しく国学者に対して対抗する歌が出ると一度にいきり立つ。

香川景樹が出ると――勢力家であり、政略家である。俗つぽい歌を作つて、人にもてはやされ、堂上家にとり入り、京にやかましく云はれたので、地方人はこれが一番良いと思ふた。

江戸末になると、歌に飽いて、変つたものが出ればよいと思ふてゐる時に変なものがもてはやされた。香川が勢力を得たのは、この実像もある。珍しいと云ふ意味があつた。その京の評判が地方へ散つて非常な勢ひで広まつたので、真淵の門下は、おさまらず香川の論難を反駁してゐる。香川はしかも宣長と仲が悪い。と思ふと秋成は、宣長を憎み、香川と仲がいゝ。

人のつきあいの気分は又別なもの。万葉ぶりの世の中がひ弱ながら江戸に出て来たのに、香川が出て古今風に返つた。古今の歌は、詞について特別の智識がなくても、十分の七までわかるのであつた。ところが、万葉はそんなわけに行かなかつた。香川はもつとくだき詞をわかりやすくし、内容までわかりやすくした。誰にでもわかる歌は、誰でも知つてゐる生活である。われ〳〵の知らぬ生活を引き出してこられるのでびつくりする。芝居で泣くところは決まつてゐる。本当にたまらなくなつたところでは、ケロッとしてゐる。それは、わかるところだけを喜び、涙を享楽に行つてゐる。本当はわれ〳〵が気付かぬところ

があつた。舞台にもわれ〳〵と同じところがあつたと、ぽつと、感じ解放せられる気持になつて泣いたり喜んだりした。昔の芝居は、孫の御飯に卵の香の物。まさか、御飯を見て笑ふのでなく、同じ生活を舞台の上で見せつけられて泣くのである。そんなのは知れてゐる。身につまされる程度なら知れてゐる。今まで持つてゐながら知らぬ世界、人間性として共通点を感じるのである。

啄木の一握の砂位は若い人は持つてゐる。云へないだけ。そんな事は、云ふて貰つても仕方ない。自分等を詩人になつた気がするから有難いのであるが、そんなのでは駄目である。自分等の思ひがけぬところを見せられて、びつくりするのである。啄木は多くは東海の歌程度である。しかしいゝものもある。

二日前に山の絵見しが今朝になりてにはかに恋しふるさとの山

等は心理学の説明のみである。心がゆるんでゐると、大きな発見だと思ふ。思ひがけぬことを抉り出されたのでなしに心理解剖に過ぎぬ。

高山のいただきに登りなにがなしに帽子をふりて下り来しかな

この歌は、形がまづいが、いゝところがある。こんなところ、われ〳〵歌にしやうと思はなかつたところである。「なにがなしに」に意識が入つてゐる。計画して云ふてゐるのでいけない。普通に認められぬところを感じてゐる。さうなるといゝが、なか〳〵至れない。

景樹の歌も、古今集の歌を学び、しかも内容の人にわかりやすい事を考へた。人にわかりやすい事を云ふのは文学の堕落である。世の中に沢山ゐる人が本当にわかつて同感する生活は浪花節になる。大衆文学もそこまで下りては駄目である。経済道徳的でないが、人間の生活を高めるためのものである。自分の生活を思ひ染ませるものでなければならぬ。

平安風な景樹の歌はわかつたので人々にもて、景樹の弟子どもが明治に持ち越して栄へた。その孫弟子が高崎正風である。昭憲皇太后の相手は税所敦子である。才女である。紫式部と肩を並べてゐると云はれてゐるが、当らない。明治の宮廷と云ふものは、ほとんど景樹派の中でも薩摩派の歌人が指導してゐた様なもの。だから歌に景樹派はもちろん一種の癖がある。それによつて至尊が歌の道を開いてゐたので、日本中は古今ぶり、景樹ぶりでなけりやならなくなつて非常に栄へて来た。明治の始め頃には、歌は文学でない事が無意識ながら感じてゐる。まだ他に文学がある。江戸の文学が例を示してゐるのである。謡を歌ふてゐるのと同じで、歌を作らなくても芸術を欲する心は慰まない事はない。

わりあひに旧派の歌は早く勢がなくなつた。その先輩は俳句で、江戸末より文学の領域を退つて愍笑文学となつてゐる。雑俳の上に俳句である。もう江戸の末にも文学から遠ざかつてゐる事を無意識ながら動いてゐた。それをほつと出て、人を集めたのは子規である。彼が俳句の改良を思ひ立ち、今の日本新聞——仮名のつかぬ新聞——を子規が日本俳句を起して、やかましく宣

伝して、一ぺんに俳句を変へて了つた。あれほど文学が一度に変る事は考へられない事であるが、前々から俳句よりもつといゝ文学があると感じてゐたのである。そこへ出た為である。子規には大学の学問、美学、文学論等が子規の頭に入つてゐて、日本の知識階級として最も進んだ知識を応用して、俳句を解剖して行つたのである。そこにはやつて見やうと云ふ意識があるので固くなつてゐる。この子規が俳句改良をある点まで完成して歌へ来た。

最も歌は江戸末の香川門下に変つた歌を作り、純粋な万葉ぶりの歌を作つた者が地方にある。又ごく自由に歌を作つた人が沢山ある。世間が非常に歌に対して新しいものを欲してゐたのは事実で、意識してゐないが作物として出てゐる新しいものの出る路は滑稽味を帯びてゐる。今までのものを茶化す気分がある為に、皮肉な滑稽が出るのであらう。その歌風に進んだ者がかなりいゝものを沢山出してゐる。

福井の曙覧。非常に人のいゝとこのある人だが、作る時は滑稽な興味が勝つてゐる。大隈言道、滑稽が低くなる。曙覧が一番影響を与へてゐる。曙覧の歌から刺激を受けて新しく作らうとした人が大分ある——明治以後——。時代がさうなる故に、ほつ〳〵と目を開けて来る人があるので、誰の影響とはつきり云へぬ。さう素直に行けば良いが、いつも学者が邪魔をする。明治になつて帝大に古典科が出来、そこで教へてゐる学者や、教へを受けた人々が新しく行かうとしてゐる事はわかつたが、今までの時代が古いからとて時代を下げて来た。

能では固苦しいから狂言を、時代物に世話物を入れる事となつた。この人々の歌は景樹派の歌より拘泥してゐてもつと悪い。その人々は新古今へ傾いた。平安末より鎌倉初期の歌を一つの歌風としてまとめあげたのであつて、そのはでな風を学んで来た。そんなのは新派の歌の運動よりすれば殆んど没交渉である。開けてゐれば、どこかで影響を与へてゐるに違ひない。それ故に学者が凝り固まつてゐても、世人の影響を受けずにはいない。こゝから出たのが、佐佐木信綱博士、落合直文等である。

ところが、落合さんは高等学校その他の先生故に門下生がある。自然、目が開いて来た。先生の影響ではない。時代が違ふ故に先生より新しいものを感じるのである。落合氏の弟子も、何か違つた世界を開いてゐないので、落合さんには止まつてゐなかつた。佐佐木、落合氏が新派の学問的色彩のある歌を中継的に始めた。旧派から新派への綱渡しをした人である。

ところが、子規がこゝ辺の人が新派の意識なしに変つた歌を作つてゐる間に、日清戦争に出て帰つて来て、病床で議論や創作をし始めた。ことに子規は文学者としては計画家であつた。良い意味の野心家であるから俳句の次に短歌である。俳句で鍛へてあるのでわざ〳〵美学を振り回す必要がなかつた。子規としては歌の方が本質である。俳句は意識があるのである。子規は戦闘力の強い人で、書けば誰とでも喧嘩をした。子規の派を俳句では日本派と云ふ。歌の方では根岸にゐたので、根岸派と云ふ。この派は子規の戦闘力を伝へて力が強い。アラ、ギの茂吉、赤彦等は戦闘力が強く、議論好きで、年中絶えまなしにやつて

ゐる。正規の遺伝である。根岸派の人々で正しさに進むのは、一種の気分である。それだけしつかりはしてゐて、どこまでも貫いて行かうと云ふ気分は他の派と比べて一番強い。子規が病後、万葉集を読んで、ほつとこれだと思ふたのである。

もつと前より子規は作つてゐた。日清戦争頃より歌を作つてゐたのである。この点が問題である。与謝野鉄幹と何れが先に新派の歌を作つたかの問題である。子規が新派がかつた歌を作つたのは日清戦争頃、子規が万葉集を読んだのは寛が勧めたからだと云ふ。云ひ出したのは寛の方が早く、議論でも子規の方が一寸立ち遅れてゐる。歌の派から考へると、大切の事で、文学史より見れば大切の事である。

子規が万葉集を読んだけれども本当に子規が新派の歌へ入つたのは遅い。子規は曙覧の歌集志濃夫廼舎歌集を読んでからだと思ふ。子規の歌に影響が出てゐる。子規は知らん顔をしてゐる。直接に影響を受けながら蓋をしておいて、ある点までやつてから云ひ出したものかも知れぬ。私は子規は曙覧の影響を受け、直接の万葉の影響でなく、曙覧を越して影響を受けてゐる。のち、だん〳〵万葉の精神を受けて来た。子規は純粋の万葉精神を生して来たものだとは私は思はぬ。落合門下等で、万葉で目覚めてゐる。真淵辺よりおこつた万葉集の歌が、景樹で圧へられて、明治になつて又復活して来た。無意識に起伏して、無意識に敵討ちしてゐる。

落合氏の系統では与謝野さん、服部躬治、尾上柴舟、金子薫園、この中で大切なのは寛。

寛が歌を新しくせなけりやならんと意識したのが古いと思ふ。与謝野氏の父、尚綱氏は寛より歌がひよつとすると上手か知れない。寛は放蕩磊落な生活をした。李家の傾く頃から朝鮮等へ行つた人で、右傾派の壮漢とも云ふべき人。世の中の南京虫の生活をしたものであるが、どうしても生活が荒く志士肌であつた。さういふ傾向の歌は、今までの歌では入らぬ。それでも落合氏の門人であるからして充分素質はあるが出方が悪かつた。志士の気分を詠もうとしたが、これはどうしても今までの歌では出て来ないところである。

酒をあげて地に問ふ誰か悲歌の友ぞ二十万年この酒冷えぬ
男の子らを南支那にやりしかどかひなやつひにりうこんいちたゝず

自分のみが孤独で世を嘆いてゐるのである。俺と心を一つにするものが誰かあらうか、誰もない。とても今までの歌と違つたのでびつくりしたのである。その中に子規も立つて来るのである。この間に中間に位してゐたのが信綱である。いつも折中派である。昔は神童と云はれた位で非常に早く、私の生れた頃に都の花等に小説を出してゐる。歌もかなり新しいところへ行つてゐた。強いて新派と名のる事はなかつた。

主として寛と子規とが争つた。寛は明星をもつた。根岸派に対して明星派又は新詩社派と称した。

二日目

寛の雑誌が出て、世の中に行はれた。それまで若い人の作る誌

がなかつた。若い人が文学に志すと短編小説その他の長いものを書かねばならぬ。歌は、若い人の生活気分にあはぬ旧い歌のみ。それに対して何か新しい歌がほしいと考へてゐた。それが無意識に感じてゐた。時が経つ中に大歌所の歌も、少しは新しくなつてゐたが、やはりだめ。そこへ寛の歌が出たので若い人が集つた。寛自身は先走つてゐたが、教へる歌は、も少し穏やかなものを教へた。それで明星が百号まで出て、一度やんで、近年になつて又出たが、またやんで了つた。大抵、若い人の歌は前の明星へ出した。はじめの頃の歌の門人、まだ明星を出さぬ中に門人——今では雑誌を持つて師弟の関係が出来る。その関係は、だから浅いものである。さういふ間に早稲田の空穂等寛の系統のものである。それで若手では、その時分のハイカラの歌を作つたが、後、間もなく寛の手元を去つて自分の歌を作つた。その空穂の一流があるが、特別にあげずにおく。

ところが、寛が明星を出してから門弟子が増し、その中に晶子—鳳姓—と殆んど同じ力で作つてゐたのが山川登美子の二人であつて、女の才で優れた歌を示してゐた。晶子は寛に嫁ぎ、山川も嫁いで歌を作らず死す。

文学と云ふものは作つてゐれば上手になる。作らぬとうまくならぬ。天分があると思ふてゐる、インスピレーションを待つて、何も出来ずに了ふ。晶子は天才の様に見えるが、実は苦しんだ人。文章も書くし、むつかしい事も書く。皆苦労したのである。明治・大正・昭和へかけて晶子位苦しんだ人はない。

女は男の十に対して六位の勉強で男と同等の力を得る。世の中変る。女の為に幸せの様で実はいけぬ。女の作家の作品は、男に比して劣る。やはり晶子は、何と云ふてもえらい苦労して、勉強して、のちに晶子の才が寛の明せつを乗り越した。私は寛の方がうまいと思ふ。女の人が亭主の近くまで行くと偉く見える。晶子が一番世の中に騒がれたのは、

鎌倉やみ仏なが(ママ)ら釈迦牟尼は美男におはす夏木立かな

これは世の普通の人に新派の歌はかういふものだと感じさせただけである。その歌に何の新味もない俗情のみ。御仏であるけれども美男だと云ふのは馬鹿にしてゐる。仏に対して一つの心持を持つてゐるから。「御仏なが(ママ)ら」等云ふ語は普通人の「ながら」で歌の語でない。

釈迦が夏木立の上ににゆつと顔を出してゐる。わかる。「美男におはす夏木立かな」、これは俳句のもの、云ひ方である。どこまでいつても短歌と俳句とは云ひ方は別。俳句は印象的なものをつなぐとあとは読者が続ける。短歌はばら〳〵並べただけではだめ。作者が一貫したものを作らぬとだめ。

古池やかはづとびこむ水の音

古池へとびこむかはづと、水の音とつなぐだけ。人間は共通な幻を描く。しかし考へて見ると、この句は考へて見るとわからぬところがある。普通俳句を知らぬ人は、物さびてしんとして、こはい感じのしてゐるところへ蛙が飛び込んで、ぞつとするほどと思ふが、俳句には季があつて、定つてゐる。この季について、いろんな連想がある。蛙が季題で春のものである。古池はさうでない。普通の人は夏のものだと思ふ人が多いかもしれぬ。

昔は文学上の習慣で春だと感じた時から春と蛙は決まつてゐる。習慣づくと思ひ浮べる。人により、時により違ふが、俳句を作る人の連想は定つてゐる。約束が習慣的に定つてゐて蛙と聞くと春と感じる。しかし昼か夜かわからぬ。そこを読者に自由に任せて作者は立ち入らぬ。自由だが、普通人に約束した共通を持つてゐる。古池の句、春の連想を起こしてゐるところへ、どぶんと入る蛙の音。自分の心の中に勝手に調和した世界を考へだす。夜か昼かゞ問題。古池で、いづれ静かなところと感じ、いづれ静かな時である。昼でも夜でも何れと限つてない。頭に浮ぶ事が大体同じ事が浮んでくる。ある程度から、大体定つた考へが浮び来る。私は俳句の遠心性と云ふ。自由ではあるが、短歌は渦のやうなもので中へ巻き込む。歌は材料だけではいけぬ。作者が自分の心に入れて、掻き回して中心へ巻き込まねば、読む人の心も抱き込めない。

曙覧の歌、

　　樵歌鳥のさひづり水の音ぬれたる小艸雲かかる松

これは俳句の真似である。俳句なら何でもない。歌はなまじい長いのでどこで……があるのか不明である。頭にほつと浮ばず、生命のないものがころがつてゐるだけである。生命あるもの、浮んだとしたら嘘である。歌と俳句とはすつかり性質の違ふもので、何れかと云へば、俳句の方が音数が少なくて、歌の方が多いが、不自由で思ふとほりに行かぬ。一つの観念のみしか入れられぬ。少くとも俳句は三つ入れることが出来る。歌は情熱で行き、俳句は智識的な遊びである。季題は、かう思ひなさいと出て来るのである。智識的の遊びである。火事と足袋・布団は冬と定つて聯想してゐた。足袋は、冬履く事が多いからである。靴下は困る。四季に関せず、炬燵等は定る。祭りと云へば、都会では夏を思ひ、地方では秋祭りを思ふのに、俳句では初夏の若草の頃と感じてゐる。京の賀茂の祭り一つの聯想を、俳句では、それを考へねばならぬ義務を負はせてゐる。相撲は秋である。宮廷の相撲が秋である。その他に、社でもやつてゐる。しかしわれ〳〵は春か夏を聯想する。俳句は智識的の定めに限られた文学で、その点短歌と違ふ。短歌は情熱で巻き込むものである。故に歌は、非常に単純にならぬといけぬ。

晶子の前掲の歌（美男におはすの歌）等は、遠心的でどこに中心があるか、不明である。世間の人の認めるのは、いゝ作者でなく、びつくりすればよい。本当の作が出ると世間の人の興味は他の人へ行く。後、晶子が長く歌を作つたので、今だに歌の上の生命がある。今では、年齢が行つたので、無理に作つてゐて、反響がない。たとへの歌ばかりである。さすがに昔は良かつた。わからぬ歌として有名な晶子の、

　　夜の帳にささめき尽きし星の今を下界の人の鬢のほつれよ

女の人が物思ひに悲しんでゐるところを、鬢のほつれまで示さうとした。少し不自然であるが、上の句はさらに不自然である。夜の帳にさゞめきのつきた星の今を。無理にくね〳〵させて人にわからなくしたのでなく、自分にさうしなければ、物足りなくて満足出来ぬのである。この頃の明星の歌は、盆栽の松、懸崖菊の歌位のもの。この歌を近頃全集で直してゐる。

よの帳さゞめきあまき星もゐむ下界の人も物をこそおもへ

昔はさういふ風に簡単に云へなかつたのである。豊かな気持で寝てゐる星もある様に思はれる……。大体わかるが、昔は、星の今を、とわからなく、くねつて云はねばならなかつた。こんなのを作ると皆いゝと思ふた。これが次第におとなしくなつた。山川登美子、事情が良ければ良くなつたが、

しら珠の珠数屋町とは何方ぞ下京（ママ）こえて人にたづね（ママ）む

よく考へて見ると、人に尋ねんと云ふ気持、歩きながら躊躇しながら歩いてゐる。気持はよくわかる。作ると、上句も下句も不用になる。下京近く来て、もうやがて人に問ひたい気持を歌つたので、こんなになると単純で女の人の柔らかさが出てゐるが、肺でこの歌が出来る頃、死んだ。

明星は、門下が沢山出来て栄へ、歌詠み、文学者が沢山出た。これに対して子規、世間的に呼びかけたのは寛。万葉等は読んでゐられたのでなく、後に勉強して、しまひには歌がとても良くなつた。奈良へ行つて、景色見て、

奈良の世は千とせの前に過ぎけるやあらずや花に佐保の風

吹く

大和辺へ春行つてゐると、あまり古めかしい土地故に奈良ののどかなところにゐるとわれを忘れて了ふ。自分が今の時分やら、古代にゐるのやらわからなくなる。古蹟へ行くと一瞬でも違つた気持が浮んで来る。奈良時代は千年前に過ぎた事は知つてゐるが、はたしてさうかしらんと思ふ。さうでないのかしらん。今が千年前の奈良か、目前の花に佐保山から吹く風があたる。少し言葉を長くすると説明になり、恍惚たる気分が出ぬ。その為に描写を避けた、文学は気分で行くか描写で行くか、描写によつたのである。

似た歌三首、景樹、

春日野に若菜を摘めばわれながら昔の人の心地こそすれ

この歌をいゝと思ふのは俳句で、自分で糸をつなぐより低級に助けてゐる。作品にないものを持ち出してゐる。それほどなら自分で作つた方が良いのに。若菜を摘むと恍惚として昔の人か否かわからなくなると云ふのは、説明。調子で歌の気分は違ふ。「御仏なれど」の下劣よりもつと下劣である。「われながら」と自分を意識してゐては、恍惚でない。「われながら」は文学の上の語でなく俗語。昔の人の心持になつてゐればならぬのに押し売りである。まづ自分がその心持に入り込まねばだめ。丁度今の世間に行はれてゐる、プロの歌は智識の遊戯、思ひつくだけ。本当の生活が出て来ると、誘惑せずにはおかぬ。文学は人を誘ひ込まねば、いゝ文学でない。文学を教育家が恐れるのはその為である。しかし、その時代のために悪くとも強い文学が出ると、後の世の為に良くなる。それで、この歌を見て心で助け、自分にわかるからいゝと思ふてはいけぬ。芝居で女人が沢山出たら、三界で女がなつて芝居がだめになつたと云ふ。これでは何にもならぬ。芸を見てゐるのでなくして、自分の事だと思ふて説いては何もならぬ。さういふ風に芸術を鑑賞してはだめ、昔の人の……等は散文である。

並べて考へると歌と云ふものはどういふものか、よくわかる。

江戸時代に景樹の盛んな頃に紀州に加納諸平あり。学者の歌でいろんな歌風をつきまぜたもの。根本的にはいゝのが、あまりいろんな智識が入つてゐた為に、今の世では入れられぬ、その時代の興味、智識で水際立つてはいないが、種はいゝと云ふ事がわかる。

曳馬野の木の芽榛原入り乱れ春日暮らすは昔人かも

曳馬野は、万葉の時分に始終都人が東国へ行く道へ通つた。こゝに榛と云ふ草がある。旅人を一日してくるとそこに王孫の花が咲いてゐる。黄色の、濃い、カンナの花に似た花が咲いてゐる。曳馬野の木の芽が張り出る頃に曳馬野へ行つて来て、そこへ人が入り乱れてゐて見てゐると春の日を暮らしてゐる。自分もその一員である。よそで見てゐるのでない。自分が一員である事がこの歌でわからねばだめ。その辺にゐる人が、皆、万葉時代に曳馬野をよぎつた人が遊んだのと同じ気持でゐる。簡単に「昔人かも」と云ふ。

万葉にも高市連黒人の歌に曳馬野の歌がある。その地で作れる。この人は日本の歌の中では時代を作つた人である。万葉の中でこの人の作つた歌はいゝ歌のみ。ハンデイキヤプなしに今の標準で行つても立派なものである。この人が諸々旅し、近江の宮で、

いにしへの人にわれあれやさゝなみの古き都を見れば悲しき

時代がみな逆である。昔の人で自分があらうかと云ふ事。人では実感なし。昔の人でない事は意識してゐる。ところが、大津の宮の付近が「さゝなみ」と云ふことである。大津と並んでゐた為に「さゝなみの志賀」とも云ふた。「さゝなみ」の都のあとへ来て見てゐると何だか悲しい気がする。俺は、昔の人でないのだが。理屈ぽく見えて、理屈でなく、一番急処をつかまへてゐる。一番単純で一番良く近代的である。これに比すると、寛の歌は恍惚を示さうとしてゐる。諸平の方は歌の詞を練つて見やうと云ふ意識がある。四首読み味はふと、歌の歩くべき道がわかる。

まづ子規の方へ移る。子規と云ふ人は、考へてゐたかもしれぬが立遅れをしてゐる。本当に考へてゐれば、新聞屋故に書いたに違ひない。後になつて争ふた。子規もはじめから万葉でなく、橘曙覧を媒介としてよんだ。子規の歌は、曙覧の影響で滑稽風が入つてゐる。日本新聞で短歌を募集して世の歌を厳選して出した。真面目な中にとぼけたものがある。

やじろべは馬にまたがり北八は荷物かたげて行く松ばやし

明治の狂歌が出た。鄙ぶり——田舎短歌から、鄙ぶりと云ふ。子規も作り、選したものにもある。

テーブルの足高机うち囲み緑のかげに茶をすゝる夏

一モジノ葱ノ青鉾フリ立テ、悪歌ヨミヲ打チテシヤマン　子規

おどけてゐる。かゝる歌を一方に作つてゐる。その中に病が悪くなり、寝てゐても苦しんでゐながら、死ぬまで勉強した人で、死にかけてゐながら人と争つてゐる。死ぬといふ際までやつてゐて執着が思はれ、偉い点。元気だが病が進むと、詠むところ

が澄んで来た。歌で苦しい〳〵と歌つてゐるのは、いつもごく軽く出てゐる。苦しいと云はないで底の底から出る歌にいゝ歌がある。苦しいだけでは言ひあらはせぬ苦しみを歌にもつ故に、良い歌が出来て来る。

若松の芽立ちのみどり長き日を夕方まけて熱出でにけり

松の心を「みどり」と云ふてゐる。緑色と間違はれぬ様に「芽立ちのみどり」と云ふて却つて気分が出てゐる。ごく平凡な歌で、病かどうか、わからぬ位である。「夕方まけて」は半わかりの昔からの語。夕方を待ちうけた様に。口で読んで見ると、動きも出来ぬ病人の生活の気持が出て来てゐる。病人がじつとこらへて自然の移り替りと自分の心持と、日々の様子を見てゐる。いゝ歌である。子規のも少し前の身体のよい頃にはもつとのんびりしてゐる。

くれなゐの二尺伸びたる薔薇の芽の針やはらかに春雨のふる

子規は俳句でもごくいらいらした気分、センチメントを出す事を避けて、出来るだけ自分を抑へて眺めた。子規が死に、門人が多く、今だに直門の人が相当に生きてゐる。その中に昔と違つて昔なら都にゐるか、技倆のよい為に評判がのぼる人では文学者は雑誌を持たねば偉く見えぬ。

子規門の一人で、たゞ一人雑誌を持つてゐたのが佐千夫で（幸次郎）、左千夫が代表した。乳屋であつた。佐千夫からして根岸派の歌の方角が定つて来た。子規では、大体歌はかうと定つた。子規は、どんな苦しみも悲しみも平気で作る態度の人。佐千夫の歌にもからかいの歌等なく、ごくやはらかで、自分の云ふ事を説明でなく気分的に深く入らうとした。女の人が歌に入るのには佐千夫、千樫等の歌集がいゝと思ふ。

この佐千夫になつてから根岸派の歌に深味が出て来た。いつまでも若い気持でゐた人である。文学者は若々しい気分を持つことの出来る人が一番偉い。

ことわりに生くるならねば人のつくす正しき言もわれを救はず

大正二年没。四十二年の歌、牛乳屋で貧乏で、牛は病になり、子供は水に溺れて死んだ等云ふ中で歌を作つてゐた。人間は道理や理屈で生きてゐるのでない。哲学・宗教で生きてゐるのでない。生きる方便は外にある。自分は苦しんでゐるので救つてほしい。人が出て精一杯説いてくれる正しい語もわれを救つてくれない。救つて欲しいのだけれども。自分自身で不甲斐ないとさへ思ふてゐる人の好意もわかつてゐるのだが、救はれ切れる事が出来ぬ。すべてわかつてゐるか。こんなのは世の甘いも酸いも舐めて苦しんだので、これ等にやはらかに云へたのである。若い時に車引きつゝ堀に落ちた人。理屈ぽいが調子を見れば同感出来る。

同年、根岸派では連作をした。一首ではだめだ、何首でも続けて作らぬと全体の生活が出て来ぬ、高い気持の前後を作らぬと、生活が全体わからぬと云ふ事を子規が云ひ、根岸派よりその形が盛んになつた。

春の葉のわかやぐ森に浮く煙わが恋ふる人や朝かしぎする

春の葉の若やかに萌えてゐる森に煙が浮いてゐる。そこに自分の恋ふる人が朝かしぎをしてゐるのか。

吾妹子が炊ぐけぶりと妹が目し現しくうかぶわが心どに(ママ)

自分の愛人の親称――わぎもこ。外を見てゐると、煙が森から浮いて出て来る。「わが心ど(ママ)」は、学問がないので詞が間違つてゐる。感のみでやつた人故に、「心ど(ママ)」と云ふ事は元気と云ふ事であるらしいが先生は心の底と考へたのである。

妹の目がまざ〳〵と浮んで来る。自分の心の底に。苦労し過ぎて、背の凝る歌である。愛人のゐるところを見てゐる中に、愛人の顔が心の中に浮んで来る。

春の樹に浮くさけむりのうつらうつら妹にわが恋ふるわが恋心

「恋ふる」を重ねて、却つて有効なのである。極く淡泊だが、気分は深いのである。かういふ歌、淡泊で印象が深い歌である。この先生の門人はアラヽギの主な人たちである。大抵、アラヽギは今でも短歌の世界で一番の雑誌である。今の歌を見るのには、アラヽギを読むとよくわかる。文学の雑誌は、どつしりしたものを読むべきである。書物を一冊読めば、誌を百冊読んだほどためになる。時代の移りを知るのには誌を読まねばならぬ。読むのには、良い雑誌を読まねばならぬ。不純さが残るのである。三文雑誌は読んで好きなのは自分の堕落である。まづ読むのはアラヽギ。その他に歌の雑誌でしつかりしてゐるものがある。今では紙の厚さと本の厚さに比例してゐる。

アラヽギの歌をする。読むのには茂吉、赤彦、古泉千樫。この三人の話をする。伊藤師の古い門人で傑出してゐるのは茂吉と千樫である。千樫は、佐千夫の影響を非常に受けてゐて、名前も貰つたのである（幾太郎）。アラヽギでは、写生をやかましく云ふ。連作と写生は根岸派の昔から（子規が唱へた）財産である。今まで歌作空想であつたのをこれからはスケツチをしてゆかねばならぬと云ふた。寝ながらスケツチしてゐたのである。硝子障子を弟子が入れてやつたので非常に喜んだ。写生を子規が歌で唱へたのは俳句の影響でそれは画のスケツチの影響である。主張から云ふと写生、作物の上には抽象的なものもあるが。佐千夫は大体写生だが、自分では云はぬ。穏やかで、深みのあるもの、気持をいたはつてまどかな気持はまどかに、暖かい気持は暖かく写してゐるが、写生とは云へぬ。先生も云はなかつた。

佐千夫の門人が勉強して写生を唱へた。佐千夫の晩年、啄木（寛の弟子）の影響を受けて歌が変つた。佐千夫の歌にも影響が出てゐる。啄木の概然的、智識的なところを、佐千夫は生かして来たのである。門人等はもつと変化したくて、又さらに変つて来た。極端に新しくなつたのは、茂吉である。変つた事を詠み出した。狂人の歌。変態な感じを世の中のものはすべて持つてゐる。変態な感じで見れば見える。変態な感じを自身持つてゐる。さういふ歌を茂吉が作つた。はじめ、余計に多い。茂吉が出て、アラヽギの歌が非常に変つて世に認められて来た。すると仲間の歌も世から認められた。その島木赤彦は、信州の教育家で、上京し、アラヽギを経営して行つた人である。十年間に

アラ、ギと自分の歌を立派にした。彼の歌は歌として動かせぬところまで叩きあげる事が理想。何首も歌を作つておいて、後に手を入れて自分の感じた事に近づけて行く。それは若い人等がよく考へねばならぬところである。自分の歌に権威を認めるのは誤り。当時はうぬぼれ。事実とらはれてゐて客観が出来ぬ。習作を作つておいてのちに、もとの感じに近づけて行つた。赤彦は一つの歌を三年も五年も手を入れてゐた人であつて、非常に苦しんだ人で、その時に感じた事を嘘いつはりなしに表はさうと苦労し、大体に成功した人である。この人の歌集も改造文庫にある。女の人には少し向かない。堅すぎて。ことに写生一点張り。外界も内界も写す。出来るだけ自分の心持、その調子まで出さうとした人である。赤彦、茂吉になると子規の写生の意味が変つた。一心にものを見つめて、そのまゝあらはさうとしてゐると、そのものゝ精神が現はれて来る。

紅葉を一心に写して、水彩画でなく、心を打たれたところをつきつけて行くと紅葉の生根が出て行く。顔でもスケッチするだけでは死んでゐる。一々の事を詳しく見て行くと、その人の精神の宿つた絵が出来るのは事実。対照が自分の心と同じ事である。写生は生根を写す事になる。外形をとるだけでなく、紅葉の内界に迫つて、行くところまで行く。結極は、自分が写すので、自分が出て来るのと同じく、写生と云ふ事は支那の画の上では、物の真髄を写す事になる。偶然アラ、ギの写生歌がそこまで行き、いよ〳〵力を得て歌を進めた。そこまで行けば写生でも偉いものである。うちこんで真髄まで行く。

佐千夫の本当の歌の系統、先生の愛をそのまゝ伝へた人、姿をそのまゝ更に延して行つた人である。まだ佐千夫では女に合はぬところがある。

千樫は、女の代はりに云ふてくれたといふ位でその□高のところ、柔らかで、素直で、弾力があつて、気品があつて、大やうなところがこの人に出てゐる。

今の歌はどうも女にむかない。昔——平安朝までは殆んど女であつたが、今歌では女では手も足も出ない。歌が女に合はない。女が勝手の文学を拓けば、別の事、後からついて行つてゐるからいけぬ。

古泉さんは女の人の今後の道を示してゐる。女の歌人をはぐゝみ育てる室の様なものである。千樫の歌集も川のほとりとて改造文庫にある。越中島の水難救済会にゐた人故。房州の人。

みんなみの嶺岡山の焼くる火のこよひも赤く見えにけるかも

山火事の歌で昨夕も火が見えてゐた。昼は注意深く見てゐない。今晩も燃えてゐる。説明しない方がよい。よくわかると、説明で連想が曲がる。穏やかで、ゆつたりしてゐる。しかも弾力がぴしつとある。簡単だけれども、足らぬところはない。円満に整ふてゐる。

山火事の火影おぼろに宵ふけて家居かなしも妹に恋ひつつ

焦つてゐる心と外界の様子と抑へてゐる心と、調子一切よくわかる。

山焼の火かげ明りてあたたかに曇るこの夜をわがひとり寝

む

こんな人が死にかけになると、やはりすごいところが出て来る。

分け入りていくら歩みし夕あかりいよよかすけき高草の原

歩いても〳〵で夕あかりが消えぬ。もうこんなに歩いたから暮れさうなものである。音もなくしんとして、自分の心の澄み切つてゐるところを示すことば。普通ならこわいところ、何か打たれるやうな気持がある。今では諸君にはこの気持が半分位しかわからぬと思ふ。こんな歌を世人がわからぬ癖に真似るからいけない。

夕ふかき高草のなかに歩み入れり頭のうへを鷺の飛ぶ音

静かな歌である。頭の上に鷺が飛んだ音がした。それだけの事である。静かな自分だけがゐる世界の様な気がしてゐる。そこへひよつと「鷺の音がした」。「　」内は足りない。

高草原あゆみかへせば西あかりまなこに沁みていよよ暗しも

何もないが、よく読むとわかる。「西あかりまなこに沁みて」が中心である。「高草原あゆみかへせば」はいらぬが、なければならぬので云ふ。こゝが重要になつてはいけない。こんなぼつとした歌が出来て来てゐる。それにしても自分の代りに歌つて貰つてゐる様である。

夕ふかしうまやの蚊遣燃え立ちて親子の馬の顔あかく見ゆ

こんな歌を世人は動物に愛情があると云ふが、そんな事を思ふて作つてゐるのでなくて、瞬間にほつとしてゐる。自分の生活と馬の生活と同じものだと思ふてゐれば、かゝる気持が出て来る。あまり違ひを意識してゐ過ぎる。そんな階級の人は富んだ人を憎み、富む人は低い人を望む。田舎では馬も人も一緒に生活してゐる。そこへほつと帰つて来て、こいつのゐるところへ帰つて来たと云ふのである。物の解釈も常識一ぺんではだめ。かく歌が変化、深つて来、今にさういふ態度が世間に行き渡つてゐる。世間にアラ、ギに反対する人が多い。アラ、ギを意識し過ぎ、又は出て及ばぬ故にいけないと云ふに過ぎない。意識せずにいゝものを作るやうにならぬといけぬ。丁度啄木は、誰とも意識せず、出た。優れた人でないと出来ない。

アラ、ギはクラシツクのものである。それに歌はクラシツクである。その中で、どの程度まで近代生活が表はせるか。どの道、近代生活は盛れぬ、勇気のない人が、文学の作れぬ人がアラ、ギに入つた。世間へプロレタリアが出て、歌を社会運動の手段にしやうとする人が出て来た。そも〳〵考へ方が間違ひである。歌でなくて、もつと鋭い道具がいくらでもある。しかし古典的とは云へ、古典と近代生活の中に亡びぬ、変らぬものがある。人間の心の中にある詞や時代的の智識で変らぬ人間の情熱である。情熱は変らぬ。昔の人の方がむしろ優れてゐた。われ〳〵は、歌でそれを得やうとする。本意のものである。外に何にもない。

今度の歌は、始めの出方が落ち着き過ぎて新派の歌。日本の短歌の歴史を解剖する事が出来なかつた。大体、筋が通つてゐると思ふ。